



ことはへびどし



へびのクリクター

トミー・ウンゲラー 作 中野 完二 訳 文化出版局 Eーウ

フランスに、ルイズ・ボドというふじんがすんでいました。あるあさ、むすこからたんじょうびのおいおいにへびがとどきます。ボドさんは、へびにクリクターとなまえをつけてかわいがり、クリクターはながくつよくそだちました。ボドさんはがっこうのせんせいだったので、あるひクリクターをきょうしつにつれていくことにします。

ギリシア神話

石井 桃子 編・訳 のら書店 991ーギ

ペルセウスという^{つよ}強く^{うつく}美しい^{わかもの}若者は、セリフォス島^{とう}の^{ひと}人びとのうわさのまとでした。しかし、それが^き気に入ら^いなかったポリュデクテス王^{おう}は、ペルセウスを^お追いは^{とお}らうために、^{しま}遠くはなれた島にすむメドウサの^{くび}首をとってくるようにいいます。メドウサは^{かみ}髪^けの毛が^{どく}毒へびで、^{かお}顔をひと^め目見^みたらだれでもすぐ^{いし}石に^か変わってしまうほどおそろしい^{かいぶつ}怪物でした。(『ペルセウス』)

古事記物語

福永 武彦 作 岩波書店 913ーコ

スサノオノ^{みこと}命が^{てん}天からくだり^{いずも}出雲の^{くに}国の^{とち}土地を^{ある}歩いていると、おやしきに行きあたりました。中では、おじいさんとおばあさんと^{しょうじょ}少女が^な泣いています。理由^{りゆう}をたずねると、^{まいとし}毎年や^くって来る^や八またの^{おろち}大蛇と^よ呼ばれる^{かいぶつ}怪物に^{むすめ}娘をひとりずつたべられ、^{ことし}今年は^{のこ}たったひとり^{むすめ}残った娘までがたべられてしまうので、^{かな}悲しくて^な泣いているとおじいさんが^{こた}答えました。そこで、スサノオノ^{みこと}命は^や八またの^{おろち}大蛇を^{たいじ}退治するかわりに、^{むすめ}娘を^{つま}妻に^やほしいと^{おろち}いいました。(『八またの大蛇』)

ヘビのひみつ

内山 りゅう 写真・文 ポプラ社 487-ウ

ヘビのいちにちは、ひなたぼっこからはじまります。たいようのねつでからだをあたため、じめんをはったり、とぐろをまいてひとやすみしたり、およいだりします。なかには、きのぼりをするヘビもいます。きづいていないだけで、ヘビはにんげんのすぐちかくにもすんでいます。

いしになったかりゅうど モンゴル民話

赤羽 末吉 画 大塚 勇三 再話 福音館書店 E-ア

ハイリブというかりゅうどが、かりにいったやまで、おおきな^{いち}一わのつるからしろへびをたすけます。つぎのひもそのやまへいくと、たすけたしろへびが、「わたしはりゅうおうのむすめで、おとうさんとおかあさんが、あなたにおれいがしたいというので、むかえにきた」といいます。

チビ竜と魔法の実

富安 陽子 著 偕成社 913-ト

ある日、ユイが学校から帰ると、夜叉丸おじさんが^{おとうと}弟のタクミと話をしていました。それは、薬師の森という大ヘビたちが^{まも もり たび}守る森を旅した話でした。そんなある夜の^{よる}こと、ユイは^{おとうと}弟のタクミが、^{れいぞうこ}冷蔵庫の中の^{なまたまご}生卵をヘビみたいにカラごとのみこむすがたを見てしまいます。ところがつぎの^ひ日の朝、タクミは^{なに}何もおぼえていませんでした。

三まいのはがき

おくやま ゆか さく 福音館書店 913-オ

あさ、ゆうたはお母^{かあ}さんにしおをかけられそうになったナメクジをたすけました。そして、^{がっこう}学校へむかう道では^{みち}車^{くるま}にひかれそうなカエルを、おひる^{やす}休みにはともだちからふんづけられそうなヘビをたすけます。つぎの^ひ日のあさ、ゆうびんうけにゆうたあての^{さん}三まいのはがき^{はい}が入っていました。はがきには、おうちにあそびにきませんかとかいてあり、ゆうたはそれぞれの^{いえ}家へいくことにします。